

長瀬久子

『エリザベス・ギヤスケルとシャーロット・ブロンテ  
——その交友の軌跡と成果——』

東京：英宝社、2011、3,000 円。xiii+340 頁。

大野龍浩

多くの関連批評を渉猟したうえで、『シャーロット・ブロンテの生涯』をめぐるギヤスケルとブロンテの人間関係を詳述し、この伝記の批評史および意義を考察した労作である。二人にこれほど特化して、『生涯』を論じた研究は、評者の知るかぎり、古今東西なかったように思う。

本書は6章からなる。「第1章：エリザベス・ギヤスケルとシャーロット・ブロンテの交友（一）」は、二人の書簡に見る互いへの認識の違いを検証し、ギヤスケルによるみずからへの関心に対して、ブロンテがかならずしも好意的な反応を示していなかったことが明らかにされる。「第2章：エリザベス・ギヤスケルとシャーロット・ブロンテの交友（二）」では、ギヤスケルの作家としての成長の軌跡を追い、小説の主題が「下層階級の人々へのキリスト教的博愛」から「中産階級の女性が家庭内で日常的に経験する苦悩」へと変化すると指摘する(96-98)。「第3章：『シャーロット・ブロンテの生涯』を読む」は、この作品を「伝記」としてではなく「虚構」としてとらえるという方針のもとに、ブロンテの死から第3版出版まで、女主人公シャーロットが父権社会の犠牲者として同情的に描かれていることを焦点に、作品解説を試みる。「第4章：『シャーロット・ブロンテの生涯』——その評価の変遷」では、出版後から現代に至るまで150年間に著された主な批評を概観し、ブロンテの人となりをもごとに明らかにしたという「絶賛」から、彼女の生涯を恣意的に脚色したという「非難」へ、『生涯』への評価が転換していく経緯を記録する。「第5章：『シャーロット・ブロンテの生涯』に見られる虚構の手法」では、この伝記に用いられた小説技巧——2種類の作者、男性領域と女性領域の対立的構成、メタファーなど——について、分析がなされる。「第6章：女が伝記を書く——『シャーロット・ブロンテの生涯』を書くエリザベス・ギヤスケルの場合」では、ギヤスケルの執筆事情が、当時の社会に

おける女性作家の事情と比較されながら、明らかにされる。高い教育、ユニテリアン派の自由な思考、経済的ゆとりに恵まれながら執筆を進めた事情と、資料収集の困難さ、伝記出版直後に起こった訴訟問題への対処などの実情が説明されている。

評者が刺激を受けた論点を2点述べる。第1は、「ブロンテの影響でギャスケルの作風が変わった」という指摘。「[ギャスケルの] 小説の題材は下層階級の男女から中産階級の女性へと変わり、作品のテーマは信仰や博愛から、平穏な家庭生活に内在する、女にとっての普遍的な問題へと移っている」(98)が、その変化のきっかけとなったのが、ブロンテとの出会いであり、彼女の作品であった、と言う。その主張を論証するために、著者はギャスケルの代表的長短編の主題を執筆順に概観したうえ、影響の具体例を『荒野の家』や『クランフォード』を例にとって説明する(第2章)。当初は「創作を、キリスト教徒としての使命を成就する手段と意識していた」(81)ギャスケルが、ブロンテの影響を受けて創作方針を転換したことが、明快な論旨で述べられる。この読みは、評者による作品構造の客観分析の結果と矛盾するので、手もとのデータを再吟味してみようと思う。

第2は、『シャーロット・ブロンテの生涯』はシャーロットをヒロインとする小説」(259)と断じ、その立場でこの作品を解釈しておられる点だ。「(伝記には)必然的に伝記作家の想像力が関わっているのであり、純粹に客観的な、対象の正確な再構築である伝記など、存在し得ない仮想の目標に過ぎない。伝記とは、描かれる対象の上に伝記作家自身の人生への関心が色濃く投影した創作に他ならない」(258-59)。伝記がはらむ虚構性については以前から指摘されていることではあるが、『生涯』の価値は伝記にはなく、フィクションとしての芸術性にある」という主張(259)は、痛快である。作品構造の客観分析を、この伝記にも適用する意義を説明するのに、援用させていただきたいと思う。

「伝記で恣意的なブロンテ像を構築したギャスケルに課せられた不当な評価を払拭することが、本書執筆の動機だった」と著者は「おわりに」で告白しておられるが(295-96)、その目的が達せられているかどうかは微妙だ。なぜなら、『生涯』は真実のブロンテ像を伝えていないとして、ギャスケルを非難するのが著者の基本的な立場だからだ。『生涯』で描かれた「堪え忍ぶ女シャーロット」像は、19

世紀には神話となっただけに、価値観の変化した現代では、作者は誤ったブロンテ像を捏造した似非伝記作家として激しい非難を受けている」(278)、「小説技法を用いて虚構性の高い伝記を書き、失敗した」(286)、などの言説は、実証的なブロンテ伝を著した **Juliet Barker** によるギヤスケル非難に、著者が同調しておられることの証左である。著者もまた、『生涯』執筆をめぐるギヤスケルの事情と『生涯』の分析を、つとめて客観的に記述された結果であろう。

(熊本大学教授)

